

〔書評〕

Leslie Paul Thiele, *The Heart of Judgment:
Practical Wisdom, Neuroscience, and Narrative*,
Cambridge University Press, 2006. 326pp.

（レスリー・ポール・ティーリー 『判断力の（核）心
—実践的知恵、神経科学、ナラティブ』）

村 井 洋

本書は政治的・倫理的判断力を考察し、現代における政治的判断力研究の到達点を総括するとともに、探究のこれから進むべき道を示した書である。著者レスリー・ポール・ティーリーはアメリカ合衆国フロリダ大学の教授であり、これまで『フリードリヒ・ニーチェと政治の魂』（1990）、『時代的考察：ハイデッガーとポストモダン政治』（1995）、『新しい千年紀のための環境主義』（1999）、『政治を考える』（2003）などの著書を執筆している政治学者である。なおティーリーはアメリカ政治学会で政治学とニューロ・サイエンスをテーマとした研究報告を行い、*American Political Science Review* 誌、*Political Theory* 誌に論考を寄稿している。

本書のテーマである「政治的（倫理的）判断力」という概念は、端的に言えば、具体的な政治的状况にあって、個々の事柄に関して決定を下し、意見を形成するときそれを導く思考のことである。たとえば、選挙民が投票行動を行うとき密接に関連するのもこの政治的能力である。しかしこの用語は日本語の読者にとって必ずしも親しまれているとはいえない。日本の政治学界ではこれまでテーマの中心に据えられたことはなく、この主題を扱った書物としては最近刊行された佐々木毅著『政治の精神』（岩波新書2009年）に引用されている丸山真男の「政治的判断」が一部で注目されているほかは、いくつかの著作が眼を惹く程度である¹⁾。

他方、アメリカ合衆国（およびカナダ）においては、政治的判断力に関する一定の研究の蓄積が存在する。H. アレントが生前行ったカント哲学講義²⁾ その編者ロナルド・ベイナーが自ら著した『政治的判断力』³⁾ をはじめとして政治的決定理論からの論考を含めて相当数の著作があるし⁴⁾、アメリカ政治学会の研究大会においてもほぼ毎年このテーマが取り上げられている。出版界の大きさ、大会規模の違いを考慮しても、ここに日米両国間の関心の強弱の差が認められるのは否めない。

1

以下本書の各章の内容に触れたい。本書における著者の問題意識を述べた序のあと、第1章では判断力概念の理念史が描かれる。ここではプラトンに始まってアリストテレス、

キケロ、マキアヴェリ、カント、ニーチェ、デューイ、ハイデッガー、ガダマー、アレント、ポストモダン（リオタール、デリダ、R. ローティーら）、現代の決定理論（H. サイモンら）が扱われている。この配列から本書の関心が窺い知れる。著者は判断力考察の素材を広く網羅的に蒐集したというよりも、選択的に扱う態度を明らかにしているからである。まず、ヨーロッパ哲学史が中心であり、キリスト教思想と東洋思想は項目としては扱われていない（ただし「ソロモン王の知恵」と仏教の「カルマ」について本文に言及されている）。その中でも関心の対象は道徳＝倫理的・政治的思考にあり、論理的判断論と美的判断力論が外に置かれていることが分かる。この書を導くキーワードは「思慮」あるいは「賢慮」と翻訳される「フロネーシス *phronesis*」ないしは「プルーデンス *prudence*」であり、カントの「趣味 *taste*」ではない。こうした選択態度の中に、著者自身の見解「判断力に相応しい考察はプラトンよりもアリストテレス、カントよりもヒューム」という認識が明確にされていると言ってよい。すなわち、政治現象が普遍的な法則性によっては表現されず、むしろ重層的な経験から生じ、それらは多様性と頻繁な時間的変化を有するものであるという認識である（第1章“An Intellectual History of Judgment”判断力の精神史）。

続いて、第2章“The Indispensability of Experience”（経験の不可欠性）では判断することにおける経験の重要性を論じている。よき判断の決め手になるのは経験の有無であるという著者の立場を、脳神経学の成果をもとに裏付けようとする。個体としての経験も種としての経験も、以前の経験が脳内神経の発達に伴って持続し、受け継がれる。さらにこの章では、コモン・センスが少数エリートの思慮（プルーデンス）と同視された伝統にもかかわらず、アリストテレスがそう語ったように、善き政体の判断者は少数の治者よりむしろ多数の被治者であるというコモン・センス論、善い経験、悪しき経験の継承と伝達の問題が展開されている。

第3章“The Power of the Unconscious”（無意識の力）では、判断することにおいて、無意識の作用が低く評価されるべきでないことが、神経科学（ニューロ・サイエンス）の知見をもとに論じられる。著者はもとより判断における理性と熟考の役割を認める。しかし、この章ではより直感的なものの重要性を詳しく探究しているのである。

第4章“Imperative of Affect”（感情の命法）は、判断することに対して感情が果たす役割を描いた章である。判断する過程では理性的であることが重要であって感情を排除しなければならない、という従来の捉え方は1980年代以降変化をきたし、感情の役割の重要性を評価する傾向が明らかになってきた。著者はそのような学的動向を背景に、脳科学的見地からは人間には外界に対応する二つの神経回路があり、このうち感情を惹起する回路は他方にある意識的熟慮の回路に比べて迅速で素早い反応が可能であり、これが作動することによって危険対処など緊急を要する事態から自己を保護できるとする。著者の喩えによれば、理性は舵、感情は帆のようなものである。ほとんどの経験は感情が担っており、感情に基づいて評価、判定、選択を行うのであるから、倫理的・政治的判断においては感情のはたらきは必須であるとする。

第5章は“The Riches of Narrative”（ナラティブの豊饒）と題される。著者がナラティブ（物語行為）を本書の中心課題と考えていたことはこの章が他の章に比べて長大であることから推察できよう。この章はエピグラフとして「ナラティブの本質について問題を提起することは文化の真の本質にかかわる考察に誘うことであり、もしかしたら人間性それ自

身の本質の考察にもなるかもしれない」(ヘイドン・ホワイト)と「私はつねに自分の物語の信憑性について確かめようとするとき茫然自失してしまうのだ」(ワシントン・アービング)の二つを掲げている。前者は物語行為が人間性の深みに届くことを示唆し、後者は物語と自己との関係に付きまとう問題性を表現している。

“Conclusion”(結論)では、以上のような諸章における実践的判断力の考察によって明らかになるのは、世界の重層性とダイナミズムであること、これに対して実践的判断力は習慣のもつ有効性を認識し(習慣を改善することはニューラル・ネットワークを新しく張り替えることである)、ナラティブを通じて仲間の心を読み取ることの重要性に気付き、心的な視野を拡大することによって対処法を考えることができると述べる。しかし、ナラティブと抽象的原理の対立など未解決の問題も多いことをも指摘している。

2

以上のように展開された本書の議論の特徴とは何であろうか。まず言えるのは、思想史的方法と経験的方法を二つながらに取り入れ、それらを接合しようと試みたことであろう。第1章において思想史的考察を加えたことは、本書の大きな特徴といえるであろう。類書にはこのような理念史的構成を纏まった形で行う記述は少ないからである。後述するように、本書は実験心理学の成果を採り入れながら、判断力を考察するためには思想家の考察もまた「経験」として不可欠であることを示しているといえるだろう。

それに対して経験の重視、感情契機の評価、ナラティブの多面的な考察など、判断を合理的・熟慮的と捉えるのみならず、広く人間性の全領域に拡大して捉えようとした基本的姿勢が際だっている。殊に、これまでの政治的判断力論研究が自己の超越論的位置を前提にするか、乃至それを理念的要請として行われていたことを考えると、脳科学を政治的判断力論に導入することによって、超越論的優越性に挑戦しようとした意義が感じられる。

第二にナラティブのもつ多面的な意義を評価し、判断力との関係を人間性全体にまで目配りする中で議論したことである。前に行った第5章の内容要約を補説する形で著者のナラティブ論を跡づけてみたい。

著者は、ナラティブが自己形成にとって決定的に重要なプロセスであると確信している。著者はデカルトの「考える自己」に典型的に表現されている、近代的な自己観、すなわち、外界や人間社会に先だって存在し、意識を伴っていることが特徴とされる超越的な自己像を解体しようと試みている。むしろ、自己は物語るというプロセスの中で形成されるものである。この指摘自体は社会的相互行為の自我形成作用に注目した H. ミードや W. ジェームズを思い出すとき格別の新味を感じさせないであろう。ティーリーは以上のことが脳科学・神経科学の実験によっても検証されるとして、いくつかの実験結果の解釈を提示する。今、紙に以下のような図像を描き被験者に見せるものとする。上下方向に太い直線が描かれており、その中央部に線よりさらに幅のある白い箱形の図形が挿入されていてこの箱形内は空白になっている。従って(地形図の鉄道駅の表示のように)黒い太線は途切れている。被験者が自分の盲点を白い箱形に当たるようにすると、そこには見えないはずの黒い線が上下の直線と同様の太さで「見える」のである。心理学者たちが「盲点における視覚補完(Filling-in)」と名付けるこの現象を、ティーリーは脳が意識以前に世界を解釈して語る物語であると考えた。アントニオ・ダマシオ他の脳科学者の説を引証しつつ、「自己」

とは脳が作り上げた物語であるとするのである。脳には外界の「統計的」情報データが蓄積されており、それを思考経済の立場で利用していると説明しようというのである。

物語が言葉の技である以上、言葉の役割が検討されなければならないであろう。ティーリーは言葉には自己を世界に即して豊かに語り、語る中で一時的な事柄と目的に集約される事柄を語り分け、物語の網の目の中に中心点を作り出す働きがあると考ええる。このように物語は自己意識という意識の高等なステージの形成に深く関与することができるのである。

次に著者はナラティブと道徳との関わりに注目する。物語には聴き手を他者の視点に誘いモラル化する機能がある。ティーリーにとって政治紛争とは自己の物語と他者の物語の衝突と折りあわせであることになるであろう。多文化主義を基礎づける物語論の一方で、ティーリーは物語と対極的な道徳原理の提出例として J. ロールズの正義の原理を挙げている。ロールズの間人観は自分のライフ・プランを合理的に設計できるという特殊な人間観であるとして、マッキンタイアが行った提案－正義を私の一つの物語として語ることを代案として提出する。これは正義を物語に託して語る中で「再存在論化」する試みだといえる。それと並行して、ナラティブに伴う小説 (novel) の描写力－ディテールを描き、経験を具体的な形態において表現する－が一般理論や普遍的原理を提示するよりも道徳的イマジネーションを耕すのに有効であるというのがティーリーの意見である。

理論よりも経験に傾斜する著者の議論は当然のことに、経験を欠く状況にある人々に救済策を差し伸べようとするであろう。ティーリーは、ちょうどマキアヴェリやホブズにとってリウイウスやツキュディデイスがそうであったように、歴史 (物語) を参照することを挙げている。これは「代用の経験」(Ersatz Experience) とでも呼ぶべきものであり、実践的判断のトレーニング場という役割を果たすものである。なぜなら、人々はサンプルを提示され、解釈のスキルを提供されることで生の持つ複雑なテクスチュアのディテールを捉える感覚を養うからである。かくして、実践的思慮を示すのは学識ある人よりむしろ、I. バーリンが示すように、小説家であるか、一連の心理学的なアンテナを備えた人々 (ビスマルク、タレーラン、ミラボー、リンカーンのような人物) なのである。

さらに、ナラティブは事柄の系列にパターンを与えることによって意味を与え、事件の過程で傷手を負った人々に回復の力を与える。「あらゆる悲しみはそれが物語られるか物語に変えられるとき耐えられるものとなる」というアイザック・ディネセンの言葉をアレントが想起するのもそのような意味合いである。「ナラティブ」とはギリシア・ラテン的語源に遡るといずれも「関係づけること」という語義に行き着く。物語は他の物語と区別されるべきでありながら比較し関係づけられるものである。それはあたかも鳥の巣 (nest) のように、別の物語に対して半ば開いた構造を有し、相互に入り組む関係を持ちうるものと考えられる。H. ガダマーの「地平の融合」にも似た作用が行われると考えてよい。

3

本書のもつ説得力と魅力は著者の広い学識と引用の豊富さに支えられているといえてよい。しかし、本書には新味のある観点の提示が際立って多いというわけではない。ニューロ・ポリティクスの観点、感情要素の強調という点いずれをとっても先行の唱道者を思い浮かべることができる⁵⁾。むしろ、本書の長所は異なった文脈で唱えられてきた諸説を政治的判断力論の更新というコンテクストへ統合した妙にあると言えるであろう。

次に、本書に関する若干の問題点を指摘しておかねばならない。

第1章に掲げられた理念史的叙述はその「人選」が著者自身の方針に照らしてすらも十分であったといえるかどうか問われるところであろう。たとえば、近年注目されている政治における感情的要素の考察として同感論の思想家ヒュームとアダム・スミスを採り上げるべきだったという異論が出されるであろう。20世紀の叙述に関しては様々な候補が挙がるにせよ、第5章では言及されているアイザイア・バーリンを含めるべきだったのではなかったか。しかし、その意義の大きさを考えれば第1章で目指された判断力概念の歴史はさらに別の一冊（ないしは数冊）を構えて然るべき重みを持った内容のテーマと言えるであろう。

次に、ナラティブの妥当性についての議論を取り上げるべきであろう。ティーリーはナラティブを普遍的原理・法則に代わる実践的判断の手懸かりとすることを望んでいる。ナラティブから最も遠い理論家としてロールズ、ハーバーマスを批判の俎上に載せ、彼らの言う普遍原理の不毛性を断定して、ナラティブに新しい実践的道德・政治判断を導く方向性を見いだそうとしているのである。確かに、ロールズの「無知のベール」とは物語を持たない人間として自分を「カタル＝騙る」（あるいは擬制された記憶喪失者となる）ことであろう。ティーリーのこの二分法はきっぱりとした印象を読者に与えるものの、特に新味あるものとは言えない。今、ロールズと共にティーリーによって批判対象とされているハーバーマスが、嘗てカントの『実践理性批判』を評して、そこには道徳法則のみあって、具体的な人間の幸福を考慮しないと批判した（『イデオロギーとしての技術と科学』）ことの再演を見るかのようなのである。普遍的法則を提示する理論への批判は本書において一貫した議論の中心線をなしている。聴き手が耳を傾け頷くこと－説得的であること－は、物語の要請であるが、ティーリーはその条件として「物語の地方 provincial 的性格」に眼を向ける。人々が考えを変化させるのは、合理的な説得ではなく、異なった物語を抱くようになるためであるという主張である。ここで著者の議論は R. ローティーによる成熟のナラティブの議論に合流していく。すなわち、悲惨さを忌避し人々の連帯を目指しておこなうナラティブの運動である。こうしたナラティブにおいてはイマジネーションと神話とメタファーが力強く働くことになる。

このような議論は世界政治の現状を見るとき、期待すべき可能性を秘めていることは疑いえないであろう。少数民族と国民国家の関係、オリエンタリズムを背景とした文明の衝突など、普遍的ルールが見いだせず、諸勢力が暴力的に拮抗している状況が容易に思い浮かぶからである。

しかし、ナラティブが存在の多様性、多元性を具体的かつ豊かに展開できる可能性を持つ一方で、ナラティブに付きまとう状況依存性、自己本位に向かう傾向性は注意を払うべき点を孕んでいる。それは、生きられた経験が、物語ることの中で自己中心的な視点を過度に強化されることによって腐敗する－自己利益の弁明に終始する－という可能性である。さらに、語る状況において既に成立している強者－弱者関係は語りを不要とする意識を容易に生み出すか、楽観的に考えても強者の物語への弱者の一方的包摂という結末に至るのではないかという危惧である⁶⁾。

ティーリーはナラティブのもつ危険性にも部分的にこそであれ、注意を払っている⁷⁾。しかし、ティーリーが自らのナラティブに与する立場とロールズやハーバーマスの立場とを

二分法的に語る語り方を強めるほど、上記のナラティブの苦境から脱する道を自ら閉ざしてしまっているのではないかと思われる。確かに本書の中にあるように正義の理論が「ナラティブ化」されることがあるとして、言い換えれば、誰かの存在する物語として語られる－例えば、被爆者の物語の中から核廃絶が、ボルティモア市の貧者の窮状を訴えて公的医療保険の重要性が、ルワンダ駐留の国連軍司令官の体験談から平和運動への関心惹起の必要が語られるように－ことが有効であっても、聞く者－語る者の関係が成立する条件を保証する「権利」は意味がないのであろうか。むしろ、ナラティブには自己－他者の相互存在承認の議論によって補完されることが強く望まれるということになるであろう。本書で展開されたナラティブへの期待はロールズ＝ハーバーマスの言う普遍的人権のような議論と包含する／される関係を想定するべきではないだろうか。

ここで筆者が想起するのはアリストテレスを代表とする古典的レトリカ（弁論術）である。そこには、ティーラーが本書で扱う感情論が組み込まれていた。しかし哲学と論理学を無視することはできなかった。それは、後者が一部の弁論術の教師たちが陥ったと伝えられる、語ることのために語る言論の自己目的化によって不可避的に起こるデカダンスに対して「防腐剤」の役割をもっていたからと考えることができるであろう。

4

以上のような問題を含んでいるとはいえ、本書が判断力研究に新しい地平を開いたことは明らかである。むしろ、上記の問題はこれからティーラーをはじめとする研究者たちによって取り組まれるであろう、判断力論の拡大深化の契機となるものと期待してよい。

関連して一つ付け加えるとすれば、本書は判断する自由の問題を前面に出して論じることにはなかった。この問題は判断する主体の存在や自由意志の問題という厄介な問題と不可分である。これは、ティーラーが採った言説戦略においては、ナラティブの問題系に組み替えられていると見ることも可能である。しかしこの問題は判断力が決断主義や合理的思考とどう関わるかという問題に結びつくだけに、一定の考察が必要であると思われる。これもまた、本書の問題提起を受け継ぐ者たちの引き受けるべき課題と言えるのかも知れない。本書は、基本的には専門書として読まれるべきとはいえ、思想史、心理学、神経科学、小説に至る多様な文献からの豊富な引用とエピソードを駆使しており、読み物としても十分読み応えがあると言えるであろう⁸⁾。

注

- 1) 将基面貴巳『政治診断学への招待』（講談社、2006年）、菊部直『移りゆく「教養」』（NTT出版、2007年）関口正司編著『型の政治学』（九州大学出版会、2008年）などが、思想史的研究としては塚本明子『動く知フロネーシス』（ゆみる出版、2008年）などがある。
- 2) Hannah Arendt, *Lectures on Kant's Political Philosophy*, The University of Chicago Press: Chicago, 1982. (邦訳は、浜田義文監訳『カント政治哲学の講義』法政大学出版局、2009年) これはカントの『判断力批判』を政治的思考として捉えた講義の記録である。
- 3) Ronald Beiner, *Political Judgement*, The University of Chicago Press: Chicago, 1983. (邦訳は、浜田義文『政治的判断力』法政大学出版局、1988年)
- 4) ほかに以下のものが挙げられる。Peter Steinberger, *The Concept of Political Judgment*, The University of Chicago Press: Chicago, 1993; Joseph Dunne, *Back to Rough Ground: 'Phronesis'*

and 'Techne' in *Modern Philosophy and in Aristotle*, University of Notre Dame Press: Indiana, 1993; Samuel Fleischacker, *A Third Concept of Liberty: Judgment and Freedom in Kant and Adam Smith*, Princeton University Press: Princeton, 1999; Ronald Beiner, *Judgment, Imagination, and Politics: Themes From Kant and Arendt*, Rowman & Littlefield: New York, 2001.

- 5) 脳科学、神経科学を政治的判断力論に関係づけた研究には以下のものがある George E. Marcus, W. Russell Neuman, and Michael Mackuen, *Affective Intelligence and Political Judgment*, The University of Chicago Press: Chicago, 2000; William E. Connolly, *Neuropolitics: Thinking, Culture, Speed*, University of Minnesota Press: Minneapolis, 2002.
- 6) R. バーンステインがローティエーに向けた批判「ローティエーの政治には公的空間がまったくないのだ・・・」を参照（谷徹・谷優訳『手すりなき思考』産業図書、1997年、445頁）。ここで言う公的空間とは議論と論証が行われる場所とチャンスのことである。
- 7) 本書 p. 260。ティエーラーは物語が社会的バイアスに同化する傾向を指摘している。
- 8) 本書に関する書評には他に以下のものがある。James R. Martel, "Who Am I to Judge?," *Political Theory*, Vol. 37 Nr. 2, April 2009.

(MURAI Hiroshi)

